

第9回おかやま音楽祭

協力 奏曲の樂しみ

III



2002年

10月5日(土)

岡山シンフォニーホール

主催/サンシャインプロジェクト
共催/おかやま音楽祭

ワーグナー 楽劇「ニュールンベルクのマイスタージンガー」
から第一幕への前奏曲

Wagner *Prelude "Die Meistersinger Von Nurnberg"* (1867)

指 揮／菊池 東

ドヴォルジャーク チェロ協奏曲ロ短調作品104

Antonin Dvůřak *Violloncello Konzert in bmoll op.104* (1895)

第一楽章 アレグロ

第二楽章 アダージョ・マノン・トロツポ

第三楽章 フィナーレ・アレグロ・モデラート

チェロ独奏／ 岩崎 洸

指 揮／ 三船文彰

————— 休憩20分 —————

ベートーヴェン ピアノ協奏曲第4番ト長調作品58

Beethoven *Piano Concert No.4 inG major op.58* (1806)

第一楽章 アレグロ・コンブリオ

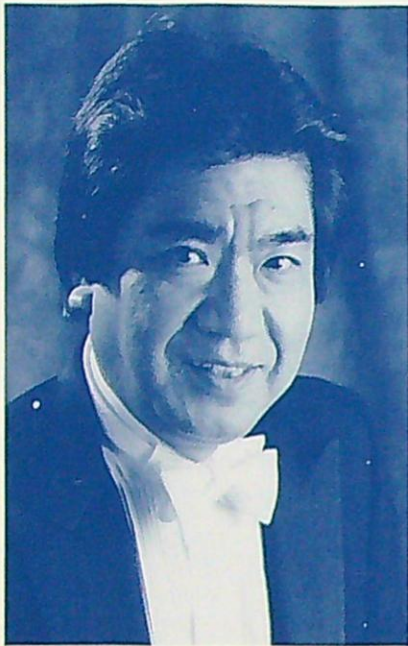
第二楽章 アンダンテ・コンモート

第三楽章 アレグロ

第四楽章 アレグロ

ピアノ独奏／ 佐藤价子

指 揮／ 菊池 東



KO IWASAKI

岩崎 洸 / チェロ

11才より斎藤秀雄氏に師事。1960年、毎日音楽コンクール第1位特賞。その後ジュリアード音楽院でレオナード・ローズ、ハービー・シャピロ、そしてプエルトリコにてパブロ・カザルスに師事。1965年「カザルス音楽祭」をふり出しに、マールボロ、クフモ、ザルツブルク、ロッケンハウス、アスペン、ウォータールー、シアトル、ポーランド、スペイン等の音楽祭に招かれ、世界の著名な音楽家と共演する機会を得ている。1967年から1970年、ウィーン、ミュンヘン、ブダペスト、カサド、チャイコフスキー等の国際音楽コンクールに連続上位入賞後、ニューヨーク、ロンドン、アムステルダム、パリ、ハンブルグ、ローマ、モスクワ各地で演奏を行い、好評を博した。1970年芸術選奨、文部大臣新人賞を受賞。国内でのレコードは東芝EMIより「ベートーヴェンのチェロ・ソナタ全集」を初めとして、1971年「現代日本チェロ名曲大系」を録音、芸術祭国内レコード大賞、併せて「レコード・アカデミー大賞」も受賞。また、外国ではギドン・クレーメル等とのカルテットをフィリップス・レコードより出している。1971年には「東京チェンバー・ソロイスト」を企画構成。また、1979年より沖縄にて、姉の岩崎淑と共に「沖縄ムービー・ミュージック・キャンプ&フェスティバル」を毎年開催し、若い人々の支持を得ている。現在、アメリカ・イリノイ州立大学でレジデント・アーティストを経て、同大学客員教授、桐朋学園大学院大学教授。ジャパン・ストリングクワルテットのメンバー、倉敷音楽祭音楽監督。

佐藤价子 / ピアノ

東京都生まれ。3才より大阪に転居。幼少の頃からピアノに才能を示し、故金澤孝次郎氏に師事。1964年大阪音楽大学ピアノ科を首席で卒業と同時に多くの演奏会に出演。故朝比奈隆、秋山和慶、堤俊作、金洪才など著名な指揮者とも協奏曲を数多く演奏。その後映画、テレビ、雑誌などでも活躍。1967年日韓親善演奏会のソリストとして渡韓。各地で演奏し絶賛を浴び、ソウル特別名誉市民賞を受賞。さらに1999年には大阪市を代表して上海で協奏曲を演奏するなど、現在に至るまで精力的に演奏活動を続けている。現在、大阪音楽大学ピアノ科講師として後進の育成にも力を注いでいる。



YOSHIKO SATO



TO KIKUCHI

菊池 東 / 指揮

1948年玉島に生まれ、5才の時よりヴァイオリンを始める。在学中広島大学室内合奏団の指揮者としてクラブ活動をつづけたら広島交響楽団の団員として活躍。広島大学工学部卒業後、上京し東京都民交響楽団のサブコンサートマスター、モーツァルト室内管弦楽団のコンサートマスター等を経験し1973年帰岡。1974年、仲間と共に倉敷室内管弦楽団（現倉敷管弦楽団）を創立。以来現在まで28年間にわたり同楽団の常任指揮者として倉敷を中心に岡山・新見・高梁・総社・日生・瀬戸・真庭・坂出など各地で演奏会を開催している。倉敷音楽祭においてはオーケストラ110名、合唱320名からなるショスタコーヴィッチのオラトリオ「森の歌」、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」、ミュージカル等を指揮。後楽園開園300年イベントで、後楽園内にて4600名の観客を集め名月観賞演奏会を行う。また、ヴァイオリン、ヴィオラ奏者としてリサイタルの他、倉敷音楽協会、玉島「蔵の中コンサート」等の演奏会でソロ・室内楽の演奏活動も続けている。

倉敷管弦楽団 KURASHIKI-ORCHESTRA

「美しい音色とよいアンサンブルで質の高い演奏を」を合い言葉に1974年設立。1982年岡山県文化功労賞、1985年倉敷市文化連盟賞を受賞。演奏曲はバロックから現代曲まで幅広く、團 伊玖磨氏作曲「管弦楽のための高梁川」。小六 禮次郎氏作曲「瀬戸内讃歌」を初演。オペラでは「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「カルメン」、「コウモリ」、「ヘンゼルとグレーテル」、「蝶々夫人」等を演奏。

創立10周年記念演奏会では400名から成る第九演奏会、15周年では「三枝成彰with倉敷管弦楽団スーパードリーム・ジョイントコンサート」、20周年ではイヴリー・ギトリス氏、岩崎 洸氏との「コンチェルトのタベ」を開催。倉敷音楽祭へも毎年のように出演し、ミュージカル「11匹のネコ」、ヘンデル「メサイア」、ブッチーニ「ラ・ボエーム」その他を演奏し大成功をおさめた。21世紀の最初を飾って、ベートーヴェンの「第九」、今年3月にはオペラ「夕鶴」を演奏。2003年はビゼーの「カルメン」全幕を演奏する予定。





BUNSHO MIFUNE

三船文彰 / 指揮

台湾台南生まれ。県立岡山朝日高等学校を経て、国立台湾大学歯学部卒業。岡山大学歯学部口腔外科にて助手をつとめた後、開業医となり今日に至る。幼少の頃、父からヴァイオリンの手ほどきを受け、14才の時チェロに転向。16才の時、岩崎 洸氏に連れられ、斎藤秀雄氏に入門し師の最後の弟子となる。その後、藤原真理氏にもレッスンを受ける。山陽音楽コンクール、台湾全国音楽コンクール室内楽部門第一位受賞。大学在学中より多数の演奏会を開催、台湾大学オーケストラと数回、台湾一周巡回演奏会などで協奏曲を協演。現在は診療のかたわら、独奏、室内楽など幅広く演奏活動を行い「チェロの楽しみ」リサイタルシリーズや岡山シンフォニーホールで倉敷管弦楽団とラロとサン＝サーンスのチェロ協奏曲独奏を独奏するなど楽歴を重ねる一方、特に学校、病院、施設などでチェロ音楽による交流に力を注いでいる。また、数年前から一流の演奏家を招いて、一期一会のコンサートも多数プロデュースし、音楽と人間の純粋な関係を追求しつづけている。

PROGRAM NOTES

ワーグナー 楽劇「ニュールンベルクのマイスタージンガー」から第一幕への前奏曲

リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）は1835年頃から楽劇「ニュールンベルクのマイスタージンガー」の構成を暖め1862年11月にこの前奏曲が完成、1867年10月に総譜を完成させた。「トリスタンとイゾルデ」と大作「ニーベルングの指環」の間に出来た三幕の喜劇である。

前作「トリスタン」にあった極端な半音階法は姿を消し、全音階で明瞭な立体感のある書法で貫かれこの前奏曲も力強い明朗な金管と柔和で軽快な弦が絶妙なコントラストを保ちつつすばらしい緊張感を高揚させていく。

ドヴォルジャーク チェロ協奏曲ロ短調作品104

1891年、長い下積みの生活からようやく世界的に認められ、いまやボヘミアを代表する作曲家となったアントニン・ドヴォルジャーク（1841～1904）の50才の誕生日を祝う記念音楽会の席にニューヨークのナショナル音楽院の創始者のジャネット・サーバ夫人も出席していた。彼女の30倍の年俸で同音楽院の初代院長に迎えるという好条件に、「ボヘミアの郷土が自分のすべてである」と最後まで渋っていたドヴォルジャークも根負けして、4年間だけという条件で渡米に同意した。しかし、この滞米の短い2年半は、ドヴォルジャークの一生で最も多忙で実りの多い時期となったようだ。

ニューヨーク到着の時にコロンブスのアメリカ発見400年祭と重なったこともあり、大歓迎を受けたりして、活力漲る新しい国に心躍らせたドヴォルジャークも、すぐ深いホームシックにとらわれ「一日も早くボヘミアの自然に戻りたい」と考えるようになった。

ところが、逆に祖国の色々なしがらみから隔離された状態が幸いしたのか、交響曲第九番「新世界から」、弦楽四重奏曲「アメリカ」、弦楽五重奏曲・バイオリンとピアノのための「ソナチネ」など、この短い間に大傑作を数多く生み出した。それでも望郷の念止みがたく、渡米2年後に最愛の父親が死去、その年に初恋の人で夫人の姉にあたるヨゼフィーナ・チェルマコーヴァが重い病の床にあるという知らせを受けて、チェロ協奏曲に着手し、そして帰国の決心を固めた。

ドヴォルジャークはこのチェロ協奏曲を作曲するべく渡米する運命にあったと言っても過言ではないくらいに、この曲はドヴォルジャークの作曲の書法の集大成をなしているだけでなく、望郷の念、親しい人の死への哀悼、自然への愛、つまり彼の心のすべてをチェロに托して朗々と力強く歌い上げている。

そして、第2楽章の中間部にヨゼフィーナが一番好きだった自作の歌曲「私をひとりにして」(op.82)の旋律を、また、1895年帰国一ヶ月後に彼女が他界したのを深く悲しんで、第三楽章の最後に新たに60小節を書き加えたことなどからも推察できるように、この曲は実はドヴォルジャークのヨゼフィーナへの鎮魂の曲とも言える。(36才の時息子が事故で死んだあとの癒えぬ悲しみから彼の出世作「スタバト・マーテル」(悲しみの聖母)が生み出されたように!)

独奏チェロはヴィルトゥオーソ的に活躍、男性的で旋律楽器としての特性を十二分に発揮しながら、古典的な手法で手堅く貫いた重厚だがスラヴ的な情熱を秘めたオーケストラとの丁々発止のかけ合いなど、死の一ヶ月前、ウィーン・フィルの演奏会で自分の第四交響曲とともに演奏されたこの曲を聴いたブラームスをして「こういうチェロ協奏曲が人間の手によって書けることを知っていたら、私がずっと前に書いたらに！」と感嘆せしめたことから分るように古今のチェロ協奏曲のみならず、あらゆる曲のなかの最高の傑作の一つと言えよう。

ベートーヴェン ピアノ協奏曲第4番ト長調作品58

ベートーヴェン(1770~1827)は生涯に5曲のピアノ協奏曲を残したが、第1番と第2番(1801年)はまだモーツァルトやハイドンの影響を濃く残した作風で、(自分でも知人に「気に入らないから、次の3番を楽しみにしてほしい」と書き送っている)第3番(1803年)以降の3曲は新しいロマン主義への道を開く、ベートーヴェン独自の作風を確立した名作となっている。

この第4番は1805~06年に書かれ、この時期はベートーヴェンが中期の「傑作の森」に足を踏み入れ、併行して交響曲第4番、歌劇「フィデリオ」ヴァイオリン協奏曲、3曲のラズモフスキー弦楽四重奏曲、ピアノソナタ「ワルトシュタイン」「熱情」がつぎつぎと生み出され、まさにベートーヴェンの創作意欲と靈感のひらめきが絶頂に達した時でもあった。

その中であって、この第4番のピアノ協奏曲は静かで一見地味のように見えて、内容的には深々とした情感を湛え緻密で磨き抜かれた書法で、抽象的と言ってもよい精神的な深さを示し、この後に作られた第5番「皇帝」を凌ぐ充実ぶりである。手法的にも、ピアノがいきなり主題を呈示し、これまでのオーケストラの前奏で始まる恒例を打破、自作のカデンツァをすべて音符にして独自のスタイルを堅持するなど、多くの独創的な創意や工夫によって古典派の様式・概念を越えて、ロマン派時代の協奏曲を予告するさまざまな特徴を示し、ピアノ協奏曲の歴史に聳え立つ高峰の一つとなっている。

初演は、完成から2年後の1808年12月22日にベートーヴェンのピアノ独奏によって行われ、当日は第5、第6番の交響曲も合わせて初演され、まさに歴史に残る1日となった。

(解説 三船文彰)

佐藤价子 × 三船文彰

Yoshiko Sato

Bunsho Mifune

三船：先生、昨年シンフォニーホールでの「協奏曲の楽しみⅡ」の時には大変お世話になりました。

佐藤：いえいえ、どういたしまして。

三船：去年、私はサン＝サーンスのチェロ協奏曲を弾かせていただいたのですが、本番の半年前から先生がピアノでオーケストラのパートを弾いて下さって、おかげ様で色々な面で大変勉強になり、心強く本番に臨むことができました。

佐藤：なにしろ、「ハイ！もう一回！」といつも「5回通しっ！」ってやりましたものね。

三船：いやー、それは本当に大変でした。私はいつもは週に一回チェロを弾くかどうか、しかも大体一楽章弾いたらもう休もうと、全楽章を弾き通したのは先生と合わさっていただいてからですし、ましてや5回つづけて弾くなんて・・・

佐藤：まあ本番は1回だけ弾けばいいと考えたら楽ではないですか。

三船：その意味では精神的にも肉体的にも大変助かりましたね。いつも5回弾かされるのですから、本番は1回だけでいいという・・・ しかも、先生はその演奏会の次の日がお誕生日ということで、「あなたがいいように弾かないと私は誕生日を迎えられません！」なんてさらにプレッシャーをかけられ大変でしたよ。そういうこともあって、演奏会が終わったらすぐに先生へのリベンジを考えたわけです。今年の先生の古希の・・・

佐藤：まあ失礼な！還暦ですよ！

三船：大変失礼しました。先生の満60才の・・・

佐藤：あまり大きい声で言わないで！

三船：（ひそひそと）満60才のお祝に協奏曲を弾いていただこうと。

佐藤：忘れもしないわ。去年の11月、あなたから電話があって「先生私は今どこに居ると思

いますか？」とおっしゃるので「大阪ですか？」と申し上げたら、「今、岡山シンフォニーホールの受付に来て、もう来年の演奏会の日を押さえました。そして、曲はベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番です！」と、もう「え！」と絶句しましたよ。

三船：その時から情勢が逆転し、「先生、いつでも5回通しの練習、おつき合いますよ！」と電話でしつこくプレッシャーをかけたりして・・・（笑）

ところで、岡山では先生とのおつき合いは私は浅いほうだと思うのですが。



佐藤：中山敬子さんが一番古くて、彼女はそれこそ高校生の時から車で大阪へレッスンに通って来てくれていますよ。今はもう家族以上の長いおつき合いですよ。その後、妹尾ひで世さんを通して佐藤真理子さん、尾曾越桜子先生、綿谷富美恵さん、荒木渉さん、その他多勢の生徒さんや音楽仲間が増えて、もう今では岡山は私の第2の故郷ではないかと思うくらい、岡山へよく遊びにこさせていただいております。

三船：それで、私はこのような方たちと、この度グループを作って、この演奏会を盛り上げようと・・・

佐藤：それがこの「サンシャインプロジェクト」ですね。

三船：「サンシャイン」つまり、音楽でみんなの心を暖かくして下さっている太陽のような先生に、さらに輝いていただこうと・・・

佐藤：まあ、うれしいわ、どうしましょう！

三船：それと同時に「サンシャイン」つまり日の丸を輝かせるという願いも込めたのです。先生や前半にドヴォルジャークのチェロ協奏曲を弾いてくださる岩崎洗先生もそうですが、日本のクラシック音楽の歴史を背負って、世界に通用する芸術を極めてこられたわけですから、日本の誇りという意味も込めさせていただいたのです。

佐藤：まあ、緊張してきましたわ。一生懸命がんばらなくちゃ！

三船：ではさっそく5回通しの練習、おつき合いさせていただきます！（笑）

ところで、昨年先生のお宅で、いまや伝説になっているハチャトリアンのピアノ協奏曲を演奏された時のビデオをやっと見させていただきましたが、あんなに凄いテクニックのいる曲を圧倒的な正確さと迫力で弾かれていて、本当に度肝を抜かれました。

佐藤：実は、あれは40代の演奏で、なんとその前に腕を骨折して、骨がやっとなつてすぐ後の演奏会でして、もう再起不能かと思いましたが、どうにかうまく行ってほっとしました。しかし、その時骨がゆがんでついたものですから、今でも腕が曲がったままですよ。

三船：そうでしたか。全然わかりませんね。なんだか鬼気迫るものさえ感じました。

佐藤：私は音楽の大好きな父母に育てられ、最近両親が亡くなるまで父と母に聴いてほしくて演奏会に出ていたようなものでした。そういう思いがずっと私をささえてきたような気が致します。しかし、今はむしろ自分のためにピアノを弾きたいと強く思うようになりました。このベートーヴェンの第4番のピアノ協奏曲は、若い時にも一度は演奏しましたが、還暦を迎えたいまでは、その時とは全然違う感じ方で演奏できるような気が致します。練習しながら「あ、ベートーヴェンはこういう風に言いたかったのか！」と一音一音再発見して、涙しながら弾かせていただいているのです。

三船：よかった！私が無理やり押し付けて！

佐藤：こちらこそありがとうございます。母の七回忌とも重なって、一生の思い出に残る演奏会となることと思います。



岩崎 洸×三船文彰

Kou Iwasaki

Bunsho Mifune

三船：先生、今年3月岡山市立政田小学校でのスタインベルクのピアノの修復コンサートでは大変お世話になりました。

岩崎：こちらこそ本当に僕も感動しました。姉（岩崎 淑）も非常に喜んで、一生の中で一番思い出に残る演奏会だったと言ってました。

三船：お父様（岩崎 千蔵先生）のご出身の九幡のすぐ隣の小学校ですものね。

岩崎：九幡には今も先祖のお墓があって、演奏会のあとに何十年ぶりかのお墓参りもできて、姉ともども感無量といいますか、とても喜んでます。

三船：そのコンサートをしていただくきっかけとなったのが、今年の1月頃に私の母の家から30年ぶりに出てきた一枚のコンサートのプログラムだったのですよね。

岩崎：30年前姉と僕が倉敷市民会館のこけら落としコンサートの時のプログラムだったそうですね。

三船：忘れもしない、その演奏会の次の日に、進路についてアドバイスをさせていただこうと、私がチェロを持って倉敷の国際ホテルの先生のお部屋に押しかけて——先生が高雄で私は台南と、同じ台湾生まれという強引なこじつけで——、先生が快く「それでは私の先生の斎藤秀雄先生に紹介してあげましょう」ということで一ヶ月後わざわざ一日あけて桐朋学園へ連れて行ってくださって、その時に斎藤先生が「一流になるなら教えてあげよう」と言って下さって入門することになった、という私の一生での一番の転機となった先生との出会いでした。

岩崎：もう30年になるのか？

三船：その30年前のプログラムを読み返してみたら、お父様のことが詳しく紹介されていて、岡山市九幡のご出身ということで驚いたわけです。私の病院から車で10分の所ですよ。

岩崎：僕は、だから岡山出身ということですよ。

三船：それがほとんど岡山市で演奏をしていただけていないという……

岩崎：政田小学校のコンサートをきっかけに、もっと、もっと岡場で演奏していきたいと姉とも話をしているのですよ。

三船：それにしても30年前の洸先生はとてもカッコよかったです。長髪をなびかせて、ロカテルリのソナタの冒頭の一弓40数個のスタッカートを目を見張るような速さで決めたり、難曲のコダーイの無伴奏チェロソナタをバッサバッサと快刀乱麻を斬るが如くに鮮やかにかたづけたり、東京で一緒させていただいたその日も途中電話で外国の友人と英語でペラペラお話をされたりと、16才の私には憧れというか目標となりましたね。先生のおかげでどんな楽器よりもチェロが一番カッコいい！という感じで、それですとチェロを弾いてきたようなものです。

岩崎：そういうこともあったね。

三船：今回佐藤 价子先生の還暦コンサートを企画するにあたって、もう一曲のコンチェルトは洸先生にお願いするしかないと思って、電話で先生に「ドヴォルジャークのチェロ協奏曲をぜひ弾いて下さい！」とお願いしたら、「それでは、指揮はあなたがやりなさい！」ということになって、まさに晴天の霹靂！なにしろ指揮などした事のない人間がいきなりこのような大曲を振るのですから！もう無茶苦茶ですよ。



2002年3月5日、「岡山市立政田小学校ピアノ修復記念コンサート」のため帰岡の時、岩崎淑先生と。

岩崎：この曲の指揮は何回やってもむずかしいと指揮者の人みんな言ってますよ。

三船：ゲ！・・・

岩崎：なにしろ40数分かかる曲だしオーケストラは独奏チェロの伴奏ではなく、むしろ交響曲のようにソロと一緒に曲を作っていくかなくてはいけないのでとても大変なんですよ。

三船：倉敷管弦楽団の皆さんも、よくこんな無茶なプロジェクトを引き受けて下さったと思います。常任指揮者の菊池 東さんが指揮のイロハから懇切丁寧に特訓をしてくださったり、彼が一番ハラハラ心配してくれているのではないかと思いますね。

ところで、このドヴォルジャークチェロ協奏曲を洗先生は何才頃から弾いてこられたのですか？

岩崎：16才位かな。これまで70~80回は演奏したでしょうね。まだ少ないほうですよ。大体チェロ協奏曲と言ったら、あとは演奏の回数から言うとチャイコフスキーの「ロココ変奏曲」、エルガー、ハイドン、シューマン、サン＝サーンス、ボッケリーニくらいで、やはりドヴォルジャークはずばぬけて人気がありますね。

三船：独奏チェロが男性的で、それでいて泣かせる美しいメロディーが最初から最後まで続いて、オーケストラのスラヴ的な節回しとリズムが特に日本人に親しみを感じさせるし、なによりもドヴォルジャークの心の底からの望郷の念、それは祖国ボヘミアというよりもこの地球の美しい自然に対して、人生への慟哭というか、何回聴いてもグーッときますね。

実はこの度、ドヴォルジャークがこの曲を書くに至ったいきさつを本やいろいろな資料で調べた結果、この曲は「レクイエム」(鎮魂曲)だということを確認しました。

岩崎：それは面白い。

三船：ドヴォルジャークが渡米2年後の望郷の念がピークに達したちょうどその時に父親が亡くなって、すぐその後に初恋の人が死の床に横たわっているという知らせを受けて、その悲しみのなかでいきなり第2楽章の、例の有名な旋律から書き出して、そのあとに第1・第3楽章の順に書き上げたようです。

岩崎：やっぱりそうだったのか。

三船：実は先日、久保陽子先生にそういうことを申し上げたら、「そう言えば、昔 洗先生のお父様の告別式で洗先生の弾かれた、この第2楽章がテープですと流れていて、非常に胸が詰まるものがありました。洗先生は忘れていられるでしょうけど・・・」とおっしゃってました。

岩崎：え！そうだったのか・・・

三船：ところでチェリストにとってこの曲はどのような曲ですか？

岩崎：チェロのソロから見れば、テクニク的にかなり高度だけでなく、3楽章にわたって持続した感情を保たせなくてはならないし、音楽的には非常にむずかしい曲ですね。何回弾いてもそう感じますね。

三船：この度はオーケストラの譜を十分に勉強させていただく機会に恵まれて、専門的にはわからないなりに、つくづくうまく書かれているなど感心したり、なんか、ドヴォルジャークの心にさらに触れられたとか、ドヴォルジャークの心に包まれたような気がしてとても幸せです。私にとってもいつか、死ぬまでいいですから一度チェロのソロでこの曲を弾いてみたいですね。恐らくどのチェロ弾きも、みんな思っていることなのでしょうけれど。

岩崎：その時は、僕が指揮してあげますよ！。

三船：ゲゲ！



